

## 関西地区研究会報告

西山 教行

2013年1月12日(土)に、京都大学吉田南構内において関西地区研究会が開催され、2つの小講演ならびにシンポジウムが実施され、30名弱の参加者を集めた。

小講演1では、本学会会長の森住衛先生から「異言語教育の教養目的と実用目的—いろいろな言語に応じた不易と流行の視点から」と題する報告が行われた。異言語教育全体と各論から、さまざまな英語教育から、また英語以外のさまざまな異言語教育から、不易と流行という視点に基づき、マクロ的考察が行われた。

小講演2では、アルジェリア・モスタガネム大学のベル＝アバス・ネダール先生が「パベルの塔の神話とアルジェリアの多言語状況—どのような将来が待っているのか」と題する報告を行った。この報告の数日後には、日本人犠牲者も発生したテロ事件が発生しただけに、アルジェリアの言語問題についての報告はテロの背景を知る上でも有益であると思われる。詳細は本号掲載の論考を参照いただきたい。

シンポジウム「言語教育の目的について」では、河原俊昭先生(京都光華女子大学)平畑奈美先生(滋賀大学)、粕谷雄一先生(金沢大学)がそれぞれ英語教育、日本語教育、フランス語教育の立場から、それぞれの言語教育が想定する目的について検討を行った。アジア英語を取り込む英語教育や、日本語が実用性を持ち得ない国や地域で日本語教育はどのような目的の下に編成されうるか、また国際社会に発信するフランス語教育など言語教育の目的の多様性を確認することができた。

今回の研究会全体は言語教育の目的を中心に多角的観点よりプログラムが編成された。アルジェリアのような多言語社会において、国民国家の構築を追求するために行われる言語教育と、モノリンガルな国民国家の神話の上に、言語教育の多元性を進めようとする日本は対照的である。しかし、この社会言語学的文脈の多様性は比較を通じて、その特徴がいつそう明らかになるのである。

(京都大学)